

「存知ですか？」  
戦前の昭和、

### 蒲田にプロ野球のグラウンドがあった

プロ野球「イーグルス」——いま、この名を聞けば、誰もが星野仙一監督率いるパ・リーグの「東北楽天イーグルス」を思い浮かべるでしょう。でも、戦前の昭和十年代のこと。蒲田駅西口周辺（女塚あたり）に、プロ球団「イーグルス」のグラウンドがあったのです。

相生小学校出身の俳優・小沢昭一さんが著した「わた史発掘」の芸能的環境篇に一行だけ、「近所にイーグルスのグラウンドがあった」という記述があります。日本のプロ野球史を七十数年前にタイムスリップしてみましよう。

「プロ野球記録大鑑」によると、我が国にプロ球団が誕生したのは、昭和九年暮、東京巨人軍が第一号でした。いまのジャイアンツです。翌年は大阪タイガース（現阪神）、さらに名古屋軍、大東京、セネターズなどが続々と産声を上げたのです。文字どおり、プロ野球の「草創期」と言ってもよいでしょう。

そして、昭和十二年二月に八番目

の球団として「イーグルス」がプロ野球に加盟しました。オーナーは財界人でユニオンビールの高橋龍太郎氏です。それでは、当時のプロ野球は、どのような状況で試合をしていたのでしょうか。

作家・川本三郎さんが毎日新聞夕刊に連載した「東京すみずみ歩き」（平成二十三年四月）に上井草球場のことを書いたくだりがあります。

「現在のプロ野球人気から考えると不思議だが、戦前の日本では野球といえは六大学野球が中心で、プロ野球は人気がなかった。野球を職業にする」ということが、一般に理解されなかったためだろう。これが当時のプロ野球の現状でした。

イーグルスは戦後になると、オーナー名と企業名を冠して「高橋ユニオンズ」となり、その後は、大映スターズと合併して「大映ユニオンズ」、さらに毎日オリオンズに吸収合併され、その名が消えることになったのです。

観客動員数が圧倒的に低いイー

グルスでしたが、記憶に残る選手もいます。昭和三十年日本球界、初の三百勝の大記録を成し遂げたスタルヒン選手。また、かつて、「プロ野球ニュース」のキャスターを十二年務めた佐々木信也さんが、ユニオンズに入団した年に新人ながら百五十四試合全イニングに出場し、リーグ最多安打を記録したことです。手元にある昭和十五年ごろの地図を見ると、女塚あたりには空き地が点在しています。現在では想像もできないことですが、きっとこの一角にグラウンドは存在していたのでしょう。野球に生活を賭けた「職業野球人」たちの夢の跡なのでしょ

（取材 六車委員）

### 編集後記

今回の二面では、蒲田西地区の呑川に架かる橋を特集しました。普段何気なく通る橋には様々な由来があるのです。呑川沿いは春になると桜が咲いてとても綺麗です。桜を見ながら呑川沿いを散歩するのも良いかもしれませんね。

また、文中にありました、呑川の近くに住んでいたという、染色家の芹澤銈介さんについては、本紙第三十号の特集でご紹介しています。

蒲田を舞台にしたドラマ「梅ちゃん先生」は好評のうちに幕を閉じました。放送を記念して、蒲田駅の東口、西口には紅白の梅の木が植樹されました。梅の花は大田区の花として、区の木クスノキとともに昭和五十一年に選定され、大田区にはとても縁のある花です。これからの蒲田を見守り、育っていく梅の木が、綺麗な花を咲かせてくれることを楽しみに待ちたいですね。

情報紙に対する「意見や感想、投稿などを事務局までお寄せください。」

事務局 蒲田西特別出張所  
大田区西蒲田七十一二一七  
(三七三二)四七八五

### 蒲田西特別出張所管内

人口	男	31,470人
	女	29,079人
	計	60,549人
世帯	33,108世帯	

平成24年11月1日現在

### わがまちの顔

### 民謡は心のふるさと

### 石塚 邦雄さん

古くから人々の間で、唄い継がれて来た民謡。今回は民謡の名取で、数々のコンクールに出場して、入賞している石塚邦雄さんを紹介いたします。



優勝旗を手に喜びの石塚さん

川清三「師匠に指南を受け、腕に磨きをかけて来ました。平成十八年には「及川流名取・及川清峰」を襲名し、週に一回、大森西区民センターでの稽古と多摩川での自主稽古で、日々精進しています。

平成十七年「第四十四回郷土民謡民舞春季大会」が、日本武道館で開催され、シニアの部では、生まれ故郷の民謡「日光山唄」で優勝しています。この大会は四日間続けて行なわれ、最終日に優勝者七人で決勝戦を行い、総合第四位に入賞しました。

平成二十一年、大田区民センターで開催された「日本郷土民謡協会城南地区連合会主催第四十九回大会」でも「日光山唄」を唄いチャンピオン戦で優勝しています。

平成二十三年「第五十一回大会」では、「足尾石刀節」で優勝し、二十一年、二十三年といずれも城南地区代表として、武道館で行なわれた全国大会に出場しています。

平成二十四年八月には、「足尾石刀節全国大会」で、入賞していますが、この大会には七年前から出

場しており、昨年からやっと予選を通過出来るようになったとのこと。全国から二五〇名の参加者があり、予選通過者は、二十名という厳しい中での入賞でした。一方カラオケも得意とし、「第十三回全国三橋美智也歌唱大会」では「おんな船頭唄」で準優勝。佐原市で開催される「おんな船頭唄カラオケ大会」では、水郷佐原観光協会賞と佐原市長賞の二つの賞を取っています。

平成二十三年、古希の記念に、イチクレコードから「思い出の民謡」と題した十曲入りCDを五百枚、自主出版しました。素人が唄っているというので親しみを感じられ、評判は上々で、多くの方に購入していただいたとのこと。石塚さんに民謡の魅力をお聞きしたところ、「ふるさと回帰・短い詩の中に味わい深い思いが込められている。また、お腹から声を出すので健康にも良い」と熱っぽく語ってくださいました。

民謡以外にも賞状書士の資格を生かして、今年九月、安方神社の祭礼では、奉納金名簿四〇〇名分を木札に書く作業をやっていたいただきました。安方北町会の役員（会計）、子供安全登校見守りボランティア（スマイルネット）等、幅広く活躍なさっています。

（取材 高橋委員）

平成24年12月1日発行

# かまにし

第46号

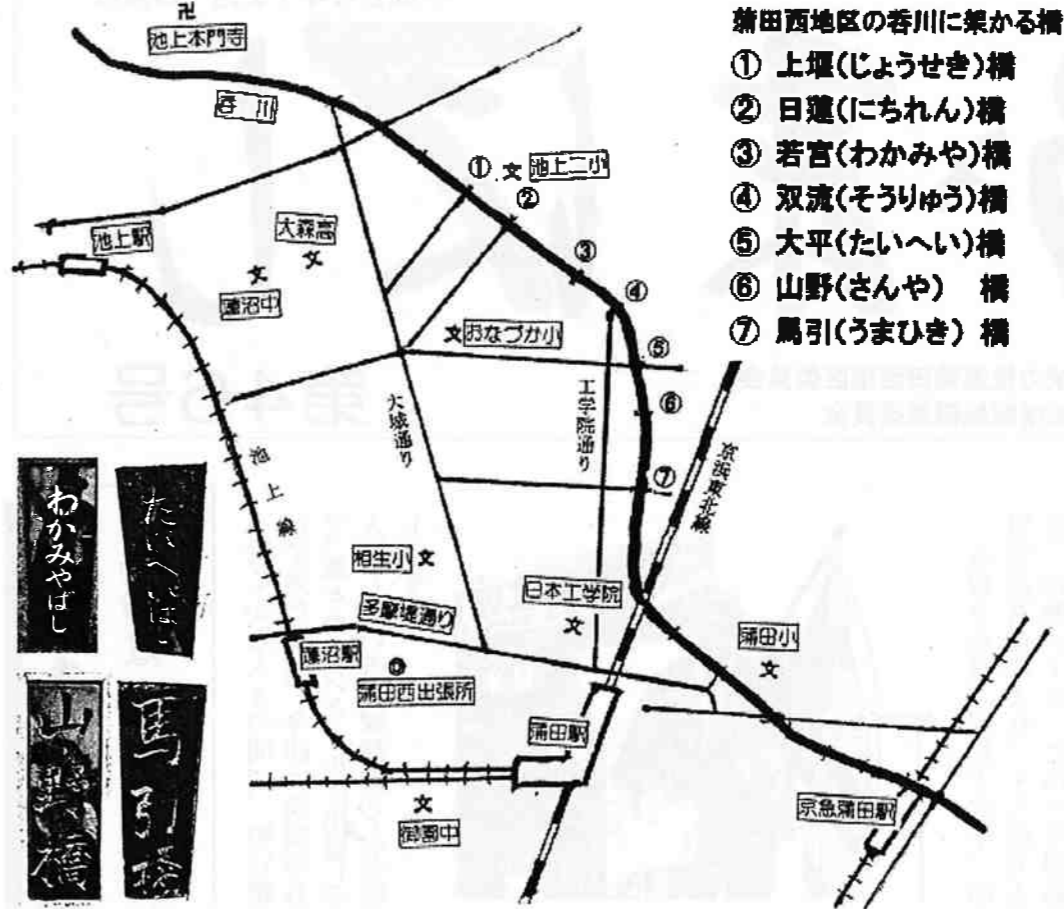
発行 地域力推進蒲田西地区委員会  
編集 地域情報紙編集委員会

石塚さんは、昭和十六年、栃木県宇都宮市生まれ。十八歳で上京後、電機メーカーに四十年間勤務されました。元々、民謡が好きで、やってみたいといったことで、二十年前に始めました。蒲田の読売文化センターの民謡教室に通い、講師のイチクレコード専属民謡歌手「及

# 蒲田西地区の呑川に架かる橋

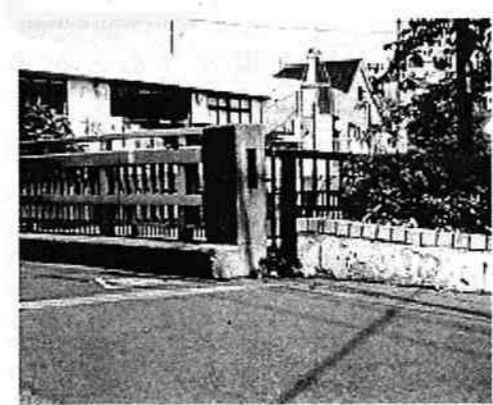
## 七つの橋の名前の由来をさぐって

- 蒲田西地区の呑川に架かる橋
- ① 上堰(じょうせき)橋
  - ② 日蓮(にちれん)橋
  - ③ 若宮(わかみや)橋
  - ④ 双流(そうりゅう)橋
  - ⑤ 大平(たいへい)橋
  - ⑥ 山野(さんや)橋
  - ⑦ 馬引(うまひき)橋



大田区内を西から東に貫流する呑川は、区内部分だけでも九キロ余りあり、六十を超す橋が架けられています。そのうち蒲田西地区内の流路は西蒲田一丁目から四丁目、五丁目にかけてのわずかに二キロメートルに過ぎませんが、その短い区間にJR鉄道橋以外に七つの橋が架けられています。上流側から名前を挙げると、上堰(じょうせき)橋、日蓮橋、若宮橋、双流橋、大平(たいへい)橋、山野(さんや)橋、馬引橋の七つになります。それぞれの橋の由来のありそうな素晴らしい名前が付けられています。そこで今回は、わがまちの呑川に架かる橋を特集しました。

上堰橋(西蒲田一十と中央八一五)は、蒲田西地区の北端に架かる橋で、大城通りと旭通り(大田区中央)を結んでいます。昭和初期までの地形図では確認できませんが、昭和十一年の『大森区詳細図』以降の地図には登場してきます。その間に出来たのでしようか。『池上町史』(昭和七年)と『呑川は流れる』(大田区教育委員会、昭和四十一年)には、中土手の中ほどから用水が分水されたとの記載があります。その上流部に堰があったのか、それとも中土手の撤去後に出来たのか不明です。



日蓮橋

若宮橋(西蒲田一五と中央八一六)は、『池上町史』に出てくる補助道(堤方字十二天、現中央)に大正十三年に架設された石橋に若宮橋の名があります。しかし同書にはその近く(堤方字沼田)にも明治三十年代から無名の木橋が架けられていたことが記載されており、現在の若宮橋がそのどちらなのかはつきりしません。付近に社があったことから付けられた名だと考えられますが、若宮については資料にもなく、地元の方々にあたってはわかりませんでした。

双流橋(西蒲田一四と中央八一三)は、呑川が大きく南(右)に流れを変える手前に架かっている橋です。かつてこの辺りから上流四百メートルにわたって、大森方面に分流するための中土手が築かれていたところから付いた名前です。この中土手が原因で水流を妨げ、たびたび左岸の池上町側に水害が起こりました。そのため池上町側では中土手の撤去に消極的な蒲田町側と対立し、昭和六年十月、百七十数名が集結し、実力で中土手を撤去、その気迫に押されて駆けつけた六十数名の警察官も止められなかったという事です。この中土手についての簡単な説明板が浄国橋下流右岸(六郷用水散策路が呑川と出会うところ)に立っていますが、実際にあったところから離

れています。若宮橋から双流橋にかけての川沿いを散策している方に、中土手のことを知っているかどうか尋ねてみましたが、どなたもご存知ありませんでした。

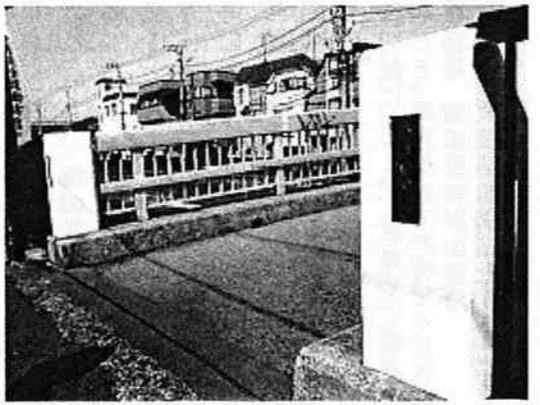
大平橋(西蒲田一一と同四一四)は、交友会通り商店街の延長線上にあります。耕地整理によって道ができ架設されたらしく、昭和初期の地形図で確認できます。大正期の付近の地名は大字蒲田宇大平耕地といひ、ここから名付けられたと考えられます。大平橋と書かれた古い地図を見た記憶があり、『呑川は流れる』にも大平橋と記述されています。西蒲田太平橋児童公園(パンダ公園)も「太」の字を使っています。

山野橋(西蒲田四一十六と同四一二十)は、明治三十九年測量の地形図で確認でき、大森・北蒲田(梅屋敷)方面と女塚・蓮沼方面を結ぶ旧道に架かっています。明治十四年測量図(迅速図)にもこの旧道は確認でき、古くから農産物の運搬に利用された道であり、橋であることが分かります。山野(さんや)は西蒲田四丁目にあった古い地名です。『蒲田郷土史』(樽林蒲仙堂 大正八年)には、東京横浜間に日本で最初の鉄道を敷設するとき、今よりもっと東海道寄り(現蒲田二丁目、妙典寺付近)を通るはずだったが、地元住民が猛烈に反対したため、止むなく山

野の一角より女塚御園を過ぎることとなった、とあります。大森地区にも山谷(さんや)という地名がありましたが、音が全く同じなので何らかの関係があるのでしょうか。(昔は同じ音に対して別々の漢字が当てられることがありました。)距離的にも山野と山谷は一キロほどしか離れていません。

馬引橋(西蒲田四一九と同五一)も、大森・北蒲田方面と女塚・蓮沼方面を結ぶ旧道に架かり、旧道は明治十四年の測量図に確認でき、橋は三十九年測量の地形図でこの位置に確認できます。古くから農産物の運搬に使われ、荷駄の往来もあつたことから名付けられたのでしよう。

現在ではマンションになってしまいましたが、かつて橋際に人間国宝芹澤銚介の染色研究所がありました。マンション前に記念碑が立っています。西蒲田地区が市街地化されたのは、大正から昭和にかけて実施された耕地整理以後でそれまでは近郊農村地帯でした。明治十四年の測量図(迅速図)を見るとほとんどが水田や畑で、わずかに農道らしい点線が幾筋か描かれているだけです。その点線が呑川を渡っていることから橋が架かっていたことは想像できますが、ほとんどが板を渡しただけの一本橋や無名橋だったのでないでしょうか。ちなみに上堰橋のすぐ上流



馬引橋

には、実際に一本橋という名の橋が架かっています。耕地整理や呑川の河川改修(拡幅・直線化)によって昔の地形が変わってしまった、また住居表示の変更などがあって、橋の名の由来についても不明なものが多いのが現状です。どなたか橋の名の由来や昔のエピソードをご存知でしたら事務局へご連絡いただきたいと思っています。

なお、本稿の取材にあたっては区役所の資料室、蒲田まちなみ維持課、郷土博物館、文化財担当学芸員の方々の協力をいただきました。

(取材 石渡、塩田、伊藤、稲岡、近藤、下山、多田委員)